

見した。(このことは後述する)これを手掛りに各地で発掘が進み、かつて日本に住んでいた人類の歴史は一挙に十万年から三十万年にさかのぼるようになるように考えられてきたのである。

三十万、四十万年前と言えば、日本各地に火山の爆発や地殻の変動が起こったが、第二間氷期のころは温暖だったため、ナウマン象を代表とする動物群が大陸と地続きの日本へ続々とやってきた。それを追って原人もやってきたとも考えられているが、洪積世末期に起こった寒期、隆起陥没、褶曲等の地殻の大変動によって、動物も原人もことごとく死滅したといわれている。

その後、つまり二、三万年前ごろになってホモ・サピエンス(知識を持つ人の意)と呼ばれる人類が、食物を求めてこの日本列島に渡来したものである。

※原人やホモ・サピエンスの使っていた石器は発見されても、そのものの化石は発見されなかったが、昭和二十五年から三十三年にかけて各地で発掘が進み、昭和三十二年(一九五九)には愛知県豊橋市牛川町の石灰岩採石場から女性の上腕骨の化石が発見され(牛川化石人)翌三十三年、浜名湖の北岸の引佐(いなさ)郡三ヶ日(みつかび)町の石灰岩採石場から人骨七片が発見され、又栃木県葛生(くずう)町の石灰岩地帯から多数の人骨化石が発見された。これらの人骨はヨーロッパの第二間氷期に住んでいたネアンデルタール人に類似していると考えられている。牛川化石人を復元すると身長約百三十五センチの成人女性となり、もしこれが当時の普通人とすれば現代の女性より大分低いことになる。男の場合も同様極めて背丈の低い人類とされている。このことから考えると、日本民族は高千穂の峰に天下ったものではなく人類出現と同時に縄文文化を生み出したものではないと言えるのではないだろうか。

三、先土器時代

この時代は氷河時代とも言われることは前に述べたが、氷河期の終わりごろには津軽、朝鮮海峡ができて日本は完全な島国になった。それから数万年後日本全土の火山活動が始まった。九州では阿蘇、霧島、雲仙、多良岳等の火山が猛烈に火を噴いたのは今からおよそ三万三千年前という。佐賀県東部地域で今でも地下五、六メートル付近から出る軽石は阿蘇熔岩の一種と言われている。


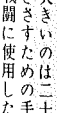

日本最古の文化は新石器時代(沖積世)に始まるとされ、それ以前の旧石器時代の日本には、人類は住んでいなかったというのが、昭和二十四年までの学会の定説であった。それは縄文時代の遺跡や遺物はローム層の上をおおう黒土の中のみ発見されていたからである。このローム層は洪積世に火山が噴火した時に降ってきた火山灰が堆積したもので、このような火山灰の降り積もるなかでは、人類はもち論動物も住めなかったと考えられてきた。

ところが、昭和二十四年夏、行商のかたわら独学で考古学の研究に情熱を傾けていた相沢忠洋という一青年が、群馬県新田郡笠懸村岩宿の切通しになったがけのローム層から黒曜石の槍先形石器を発見した。この旧石器時代遺跡「岩宿」の発見をきっかけに、これまで見過されていた縄文初期のものが包含されている層より更に下層のローム層まで掘り下げて発掘調査が行われるようになった。その結果、北は北海道から南は九州まで土器を伴わない石器だけを出す遺跡が次々と発見され、その数は千以上といわれている。又こういう石器を使用した人骨の化石も続々発見された。

このように土器を伴わない時代を「先土器時代」又は「無土器時代」と呼んでいる。この先土器時代におけるこうした発見から、日本の歴史は大きく書きかえられることになった。すなわち、日本最古の文化は縄文時代ではなく、すでにこの先土器時代に始まったと考えられ、次の縄文文化を生み出していったのではないだろうか。

では、この時代はどんな石器を使っていただろうか。先土器時代の代表的な石器を古いものから順に挙げると、およそ次のとおりである。

分類	種類	摘要 (使用法は概して推定)	県内の遺跡	大和町の遺跡
分	敲打器	そのまま搦ったり、木の枝をしばりつけて、動物を殺傷したり、物を叩き割ったりする。河原石を打ち欠いたり、ほぎとったりして作った。	●小城郡三日月町東分下古賀 ●小城郡三日月町東分大塚山	大和町の遺跡
	礫器	握りづちとも言い(つぶて)の両面にかんりの加工をしたもので、大礫器と同じような使い方をした。	●唐津市唐ノ川一ノ坂	
	握斧状石器	石核(石の心)に当たる部分を更に次々にはぎとった縦にうすいもので、長軸の両側線がかみそりのように鋭い刃をしている。大きさはまちまちであり長い方で二・五センチくらい。	伊万里市二里町平沢良	
	縦長剥片刃器	石刃に近い形をしており、たてに長い剥片で、刃が鋭い。長いのは八センチのものもあり大きさは一定していない。物を切ったり、けずったりするのに使う。	●東松浦郡七山村荒川峠	
ナイフ形刃器	縦長剥片刃器や石刃のようなものを、鋭い刃の反対側をつぶしてナイフのように厚い背をつけて使い易くしたもの。	●多久市三年山及茶園原 ●佐賀市久保泉町川久保		
錐器	小さな剥片や石刃の先端をとがらせて、穴をあける道具として使用した。			

約一万六千～一万年一 約一万四千年前	槍先形尖頭器		大きいのは二十センチもある。主として物を突きさすための手槍や投槍等の槍先として狩猟や戦闘に使用した。	●小城郡三日月町西分地藏山
約一万四千年前	細石器		幅二―四ミリ、長さ二―四センチ、厚さ一―二ミリ程度の小さく細長い石器で、木や骨角の棒の胴部に細い溝をほりこみその溝に細石器の半身をはめこみ樹脂等を流しこんで固め、槍、もり、のこ、かまなどを用いた組合わせ道具である。	●多久市綿打 ●佐賀市金立町大門 ●佐賀郡富士町馬場野
約一万四千前―一万二千年前	有舌尖頭器		尖頭器の基部に舌状の突起をつけたもので尖頭器よりも小形である。主として投槍や手槍等の先頭部として、又ナイフとして使用した。	●今山の船塚 ●北東

※●三日月町東分の下古賀や大塚山遺跡からは、洪積世の中位段丘の地層の中からサヌカイト製の握穂(にぎりづち)と握斧(にぎりおの)が発見されており、現在のところ県下では最古の遺跡とされ、その時期は約四万年前であろうと推定されている。

●サヌカイトは讃岐(さぬき)石ともいわれ、古銅輝安山岩のことで、四国の香川県にとれたものを、ドイツの岩石学者ワインセンクが名付けたものである。たたくと金属製品をたたいた時のような音を出すので、「カンカン石」とも呼ばれ、火成岩の一種で、割ると小刀のようなすどい切り口になるので、石器の材料として愛用されたものであろう。

●黒曜石も火成岩の一種である。石英粗面岩や安山岩となるべきマグマ(岩しよう)が地上に噴出して急速に冷えて固まったものである。きめの細かい黒色の光沢のある天然のガラス質の岩石である。硬度が比較的高く、打ち欠いたり、押圧を加えてはがす場合、割れ目が貝殻状になって鋭い側縁ができ易いので、利器の材料として広く利用されたものである。佐賀県では伊万里市の腰岳に多く産した。

わが大和町は先土器の遺跡が今のところ未発見だが、隣接する三日月町や佐賀市の金立町・久保泉町、富士町などから先土器時代の遺跡が発見されていることから考えて、大和町の山麓地帯の丘陵をもっと

くわしく調査するならば、先土器時代の遺跡が発見されるという期待が持てそうである。

先土器時代の人々は、土器の製作や使用することを知らず、主に黒曜石やサヌカイト等を材料として作った打製石器を使用していた。住居は岩かげや洞穴を利用して、枝のある立木に横木をしばりつけて、片側や両側から数本の本などを立てかけ、その上にかやその他でおおいをするといった極めて簡単な小屋がけ程度のものであったと推定され、川や泉の近くの見晴らしのよい丘陵の上に作られていた。静岡県で発見された先土器時代の炉の跡から見ても、大きな炉を中心に家族の集まりくらしいの小さな集団で生活を続けただろうと想像される。この炉は火の保存、調理、保温、照明と多様な役目を果たしたであろう。彼らの社会は家族の集まりくらしいの小集団によって構成され、野生の動物や食用植物をとって食べる自然採集経済であったことから、その食料を求めて、季節的にあるいは短期間に転々と居住地をかえてジプシーの生活をしたものと考えられる。

四、縄文時代

概説

今からおよそ二万二千年以上前のころは、まだ阿蘇や雲仙、多良等の火山活動が激しく続けられていたが、やがてそれも次第に治まり、わが佐賀にもどこからともなく土器を作る人々がやってきた。筑紫

山麓一带に竪穴住居を作って、狩猟や自然植物採取の生活を続けるようになり、先土器時代の人々と長い間に解け合ったことであろう。こうして佐賀人の先祖も出現したのである。

彼等は土器の外に石器や骨角器も使ったが、この時代はもう新石器時代に入るのである。彼等はわが国最初の土器と言われる縄文式土器（縄文土器）と呼ばれるものを製作使用した。したがってこの時代を「縄文式文化時代」とか「縄文文化時代」とか「縄文時代」などと呼ぶのである。

土器は自然の柔かい粘土をこねて器形を作り、様々な文様を入れ、それに火熱を加えて焼いたのである。今まで貯蔵のための容器、物を煮炊きたり、食物を入れる容器がなく、火で焼くか、生のままで食べることしか知らなかった人々が、この土器の製作使用によって、どれだけ生活が便利になったかわり知れない。今まで食べにくかった食物も煮れば容易に食べられるし、食物の消化、吸収も促進されるし、殺菌もできるので、人間の体質も大きく改善されるきっかけとなったのである。つまり、土器の製作使用は食生活の革命をもたらしたものである。

縄文時代は考古学界では、土器の形や、文様等の特徴を基にして型式を作り、同じ型式の土器に対してその代表的な遺跡の地名や文様の名をとって土器の型式名とし、又遺跡の地層によって年代順に配列している。この型式により縄文時代を早期、前期、中期、後期、晩期の五期に区分するのが普通であるが早期の前に草創期を設定して六期に区分する学説もある。

縄文時代の主な事から（井上光貞編「日本の歴史」年表より）